2016年10月30日　礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き４章13～22節

説教：だれに従うべきか

あらすじ

宮に通じる「美しの門」のところに、生まれつき足に障害を負っていた男が施しを求めていました。たまたまそこをペテロとヨハネのふたりが通りかかったとき、ペテロは、「お金はないが、私にあるものを上げましょう」と言ってから、「ナザレのイエス・キリストの名によって歩きなさいと」と命じました。するとたちまち男は立ち上がり、はねたりおどったりし始めます。すぐにこの事件のうわさは宮の中にいた人たちに伝わり、大ぜいの人々が集まって来ました。その結果、その日五千人の人々が救われたと書かれています。

ペテロは群衆に向かって三つのことを語ります。一つ目。あなたがたは神のひとり子として遣わされてきた方を十字架につけて殺した。二つ目。しかし父なる神はこの方を死者の中からよみがえらせました。三つ目。だからあなたがたは自分がしてしまったことを悔い改めて、神に立ち返りなさい。

そのようなことを語っていたとき、神殿警察がやってきてペテロとヨハネを逮捕し、大祭司が尋問し、ペテロが証言した。それが前回までのあらすじでした。きょうはその続きを見て参ります。

１　脅迫する大祭司たち

日本には反社会的勢力という方々がいて、それぞれの町や地域をシマと呼んで支配しているそうです。例えば他の組の者がやってきて勝手に興業とか商売をやることを許さない。やるなら、まず組の親分の所に行き、それ相応のお土産を献上してあいさつをしなければならない。そういうしきたりがあるのだそうです。

ペテロとヨハネを逮捕した大祭司が言っている事はそれに近いものがあります。「俺たちのシマ荒らしやがって。勝手な真似は許さない。」そこでこうすることに決めます。17節。「これ以上民の間に広がらないために、今後だれにもこの名によって語ってはならないと、彼らをきびしく戒めよう。」そしてふたりを呼び出してから、18節でこう言います。「いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない。」

17節と18節を見比べてみてください。大祭司たちが気にしているのは何かがわかります。イエスの名前を恐れています。どうしてでしょう。ペテロは大声で「あなたがたはイエスを殺した」と叫びました。そのとおりです。大祭司たちこそイエスを裁判にかけ、十字架につけて殺した張本人でした。とても穏やかな気持ちで聞くことができなかったのでしょう。

２　ペテロとヨハネ

１）証言

これに対してペテロとヨハネは反論します。19, 20節。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいのか、判断してください。私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」

私がもしペテロとヨハネの立場であったらと考えます。私も同じようにできるのかどうか、まったく自信がありません。情けない話ですが、「イエス・キリストなど知りません」と口走るかもしれません。もしそういうことになったら、牧師は口では大きなことを言っていたが、あきれたものだと大いに軽蔑していただくしかありません。

2）見たこと、聞いたことを

でもペテロがこんなに自信に満ちていることを不思議に思わないでしょうか。つい数ヶ月前、これと似たよう場場面になったとき、急に怖くなりイエスを否定して逃げたのです。それがいまはこうなる。どうしてでしょう。

ペテロは反省をし、「もう繰り返しません」と誓いを立て、自分の力で良い信仰者になったのか。ところが聖書のどこにもそんなことは書いていない。ではどういうことか。ヒントはペテロ自身のことばの中にあります。20節。「私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」彼らは、なにかを聞きました。彼らは何かを見た。そのことによってふたりは大きく変えられた。そう言っているようです。ではいったい何を聞いたのか。いったい何を見たのでしょう。

３　イエス

1）イエスが語った三つのこと

そのことと関係する箇所としてルカの福音書の24章45〜49節を開きます。イエスがよみがえられたお姿を弟子たちに現したとき、イエスは驚いている弟子たちにこう語りました。「(旧約聖書に) 次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中かよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらのことの証人です。さあ、わたしは、わたしの父が約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高きところから力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

イエスが語ってくださったことは三つあります。一つ目。キリストは苦しみを受ける。言い直せば、私たちはキリストを十字架で殺したということです。

二つ目。三日目に死人の中からよみがえる。

三つ目。罪の赦しを得させる悔い改めがエルサレムから始まる。これも言い直せば、あなたがたは罪を赦していただくために悔い改めて神に立ち返りなさい、ということになる。こうしてみると、ペテロはイエスが語ったとおりのことを忠実に群衆に宣べ伝えていたことがわかります。

2）イエスが見せてくださった三つのこと

次にペテロたちは何を見たのか。それを考えます。これも三つあります。すべてイエスが語ってくださったことばと関係します。一つ目。キリストは苦しみを受ける。キリストは人々の見ている目の前で十字架につるされていきました。そこで神のひとり子が苦しみを受け、死んでいったのをすべての人が見ていました。

二つ目。キリストは死人の中からよみがえる。ことばだけではない。弟子たちの前によみがえられたキリストが現れてくださり、はっきりと自分の目で見た。さわりました。

三つ目。イエスは、「わたしの父が約束し

てくださったものをあなたがたに送ります」と語りました。弟子たちは、言いつけどおりにエルサレムにとどまりそこで待っていました。そうしたら、十字架のできごとから五十日経ったとき、大きな音とともに聖霊が集まっていた人たちに降ります。続いて、学問がない田舎の人たちが突然外国語を滑らかに話し始めた。その結果、大ぜいの人たちが悔い改めて神に立ち返っていった。弟子たちはそれを全部見ていました。

今三つのことを上げましたが、見たことは全部、イエスがあらかじめ語ってくださったとおりでした。ペテロは聞いたこと、見たことをそのまま、大祭司たちの脅迫をものともせず証ししていきます。その力はどこから来るのでしょうか。

３）弱い者を励ます神

ペテロとヨハネがふたりだけでがんばっているのではありません。ここには神の守りがあります。よく見てください。大祭司たちはなんと言っているか。14節。「いやされた人がふたりといっしょに立っているのを見ては、返すことばもなかった。」16節。「あの人たちによって著しいしるしが行われたことは、エルサレムの住民全部に知れ渡っているから、われわれはそれを否定できない。」

いやされた人はただそこに立っていただけで、何もしていないように見えます。でも実は、この人は大きな働きをしていた。大祭司たちがペテロとヨハネに手を出すことができないように、大きな盾となっていることに気がつきます。神がここにおられ、ふたりを守っていたのです。

４）イエスが見せてくださったもう一つのこと

さて最後に考えます。ペテロは問いかけています。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。」

私たちはだれに従うべきでしょうか。聖書は非常に控えめです。自分で考えて判断してください、としか言わない。私たちはどう考えますか。もちろん皆さんは言うでしょう。神に聞き従うべきである。でも、実際はどうですか。いつも聞き従っているのか。教会にいるときはそうかもしれませんが、一歩外に出て家に帰ると怪しい。日曜日は聞き従うけれど、他の六日間はどうも自信がない。私の経験から、そういう人が多いのではないかと思います。そんな人は、駄目クリスチャンということでしょうか。

ペテロを見ましょう。彼はエイスを見捨てて十字架につけて殺した、まさに駄目クリスチャンです。その彼がいま、たとえ殺されることになっても神に聞き従うことを選ぶと言う。なぜか。

たとえ駄目クリスチャンであっても、神はペテロを愛し続けます。ペテロはその愛をどこでわかったか。よみがえられたイエスが来てくださったときではないですか。いったいそこで彼は何を見たか。イエスの手とわき腹には、十字架で負った傷がしっかりと残っていました。だれですか。その傷を負わせたか。大祭司ですか。そうです。では自分は関係がないのか。いや、大ありです。あの傷を刻んだのは自分である。ペテロはそのことが痛いほどわかる。おそらく見るのが苦しかったはずです。でもイエスはひとこともそのことを責めません。神のひとり子を殺した者さえも、神は赦してくださる。あの傷を見たとき、ペ

テロは神の愛の深さを知っていきました。

５）だれに従うのか

神に聞き従うのは、神が愛してくださったからという理由の他にもう一つの理由があります。真理があるかどうかもたいせつです。真理があるなら従う価値があるとわかる。では、大祭司に真理があったのか。ありません。なぜか。いやされた人が目の前に立っているのに、認めようとしない。ただ自分たちのプライドや地位を守ることしか考えません。本当はイエスという名前が良心に刺さってちくちくと痛んでいます。そのことをしているのは聖霊の働きです。けれども絶対にそのことは口にしない。正直になろうとしません。聖霊にさからに続けます。そこには真理がありません。

ではどこに真理があるのか。神にあります。それで私たちは神に聞き従うべきであると、頭では知っています。いっぽう聞き従うことが難しい弱い者であることも知っています。どうするのか。ある方は、他の方のつまずきになるのでそんなことは口にしてはいけないと言う方もいます。でも無理をしてどうなるのでしょう。そんなことをしていたら、いつか大祭司のようになってしまい、真理から遠ざかっていくのではないですか。

神の前で正しいことは何か。表の自分と隠れた自分が一致していることではないですか。そうしたら、私たちはありのままの自分の姿を正直に告白するしかりません。自分には真理がない。聖霊の促しの中で、そう言うしかない。

神はどうされるのでしょう。神は真実な方ですから、正直に告白する者を喜んで迎え、罪を赦します。そのために進んで十字架にかかりになります。